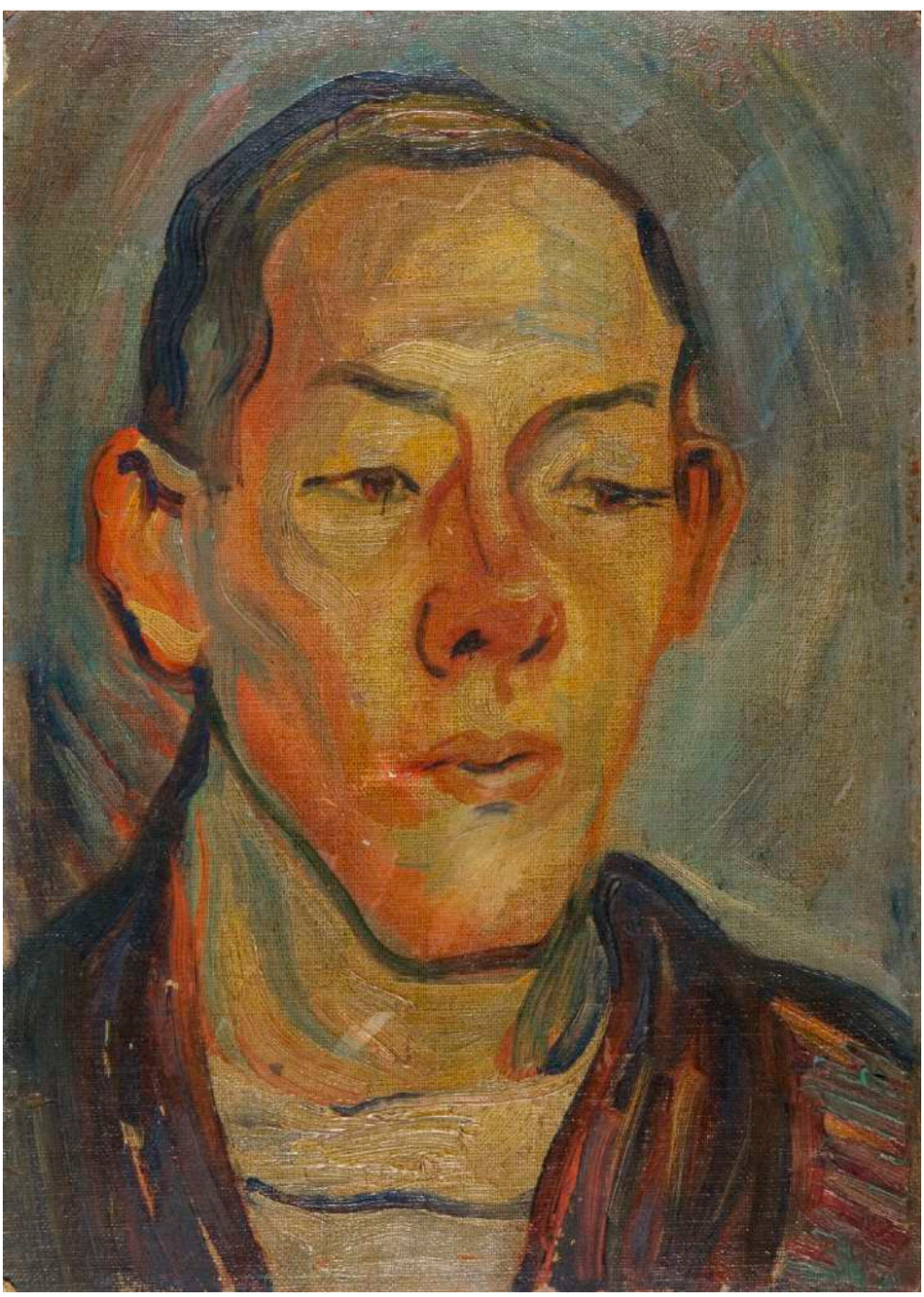
news

THE MUSEUM OF MODERN ART, WAKAYAMA

2019 **099**



岸田劉生《男性肖像》1912（明治45） 油彩、キャンバスボード
「コレクション展 2019－春 ＋新収蔵作品」より

広がるコレクション

「コレクション展 2019–春 ＋新収蔵作品」から

4月27日から5月19日まで開催した「コレクション展 2019–春 ＋新収蔵作品」は、過去5年の間に新しく収蔵した作品を展示の中に数多く組み込む構成としました。当館のコレクション展では「特集」として、作家や時代など、特定のテーマのために展示室を区切って紹介することも行っています。しかし今回は、時代や表現の異なる新収蔵作品を一部屋にまとめるのではなく、これまでの収蔵品と関連づけて展示することで、コレクションの広がりをご覧いただこうと考えました。そのため展示構成も、「和歌山ゆかりの作家と近代日本の美術」、「戦後の関西とアメリカの美術」、「版画の表現」、「現代の美術」、「人間像」という、当館の主要なコレクションを紹介する一般的な流れとしました。

「和歌山ゆかりの作家と近代日本の美術」では、昨年度収蔵した岸田劉生の《男性肖像》（図1）を、館蔵品となってから初めて紹介しました。2016（平成28）年の「動き出す！絵画」展に関わる調査で新たに発見した、ポスト印象派の影響が強く表れている初期の貴重な作例です。近年収蔵した有島生馬や木村荘八、小林徳三郎らの油彩画とともに、明治末から大正中期の美術をより豊かに提示できるようになります。彫刻では、保田龍門とともに日本美術院の彫刻部を支えた石井鶴三の作品がコレクションに加わりました。

戦前の渡米画家の作品として、清水登之の《ヨコハマ・ナイト》（図2）が収蔵できたことは重要です。当館でこのテーマの中心作家である石垣栄太郎については、《ハーレム裁判所の壁画（「奴隷解放」の部分）》*を収蔵したばかりですが、これらにより渡米画家の活動をさらに幅広くたどることができるようになります。

図1　岸田劉生《男性肖像》
1912（明治45）　油彩、キャンバスボード

図2　清水登之《ヨコハマ・ナイト》
1921（大正10）　油彩、キャンバス

昨年度開催した「国画創作協会の全貌展」で作品を紹介した丸岡比呂史による《犬》（図3）は、同会創立会員で本県出身の野長瀬晩花を中心とする日本画のコレクションに新たな一面を追加します。長く白浜で制作を続けた原勝四郎の《風景（番所鼻）》（図4）は、原がまさに同地で暮らし始めた翌年に描かれた作品です。当館では制作年が最も早い原の風景画となり、その活動をより多面的に紹介できることになります。

「版画の表現」では、当館のコレクションを特徴づける版画の新収蔵作品から、靉嘔、山中嘉一、池田満寿夫など、デモクラート美術家協会に関わる作家の作品を中心に紹介しました。靉嘔の2点の版画はともに1960（昭和35）年の作品で、同会解散後に移り住んだアメリカで作られたものです。どちらの作品の裏にも第2回東京国際版画ビエンナーレの出品ラベルが貼り付けられている点も貴重です。

海外作家の版画としては、ドイツ人のマックス・クリンガーによる《間奏曲》（図5）のセットを収蔵し、紹介しました。合わせて展示したのが、ミュンヘンで1896年

「和歌山ゆかりの作家と近代日本の美術」コーナー

「版画の表現」コーナー

図3　丸岡比呂史《犬》
1925（大正14）頃　顔料、絹

図4　原勝四郎《風景（番所鼻）》
1932（昭和7）　油彩、ボード

図5　マックス・クリンガー《間奏曲》より「熊と妖精」
1881（明治14）初版発行
エッチング・アクアチント、紙

に創刊された雑誌『ユーゲント』（図6）と、1910（明治43）年に日本で創刊された雑誌『白樺』です。『ユーゲント』はユーゲント・シュティールという世紀末ドイツ語圏で流行した美術様式を代表する雑誌です。クリンガーも誌面で紹介されています。創刊から1920（大正9）年刊行分までを収蔵しました。『白樺』は、西洋美術に関わる情報を多数掲載することで、同時代の美術に影響を与えました。全冊収蔵したことで重要な資料として活用できます。クリンガーは同誌においても、特に初期の号で紹介されています。

戦後の美術では、デモクラート美術家協会の中心人物であり、長く関西の美術界を支えた泉茂の作品が多数コレクションに加わりました。本展で紹介した木下佳通代（かずよ）や奥田善巳など、同じく関西を拠点に注目される活動を行った作家の作品とともに、戦後関西における美術の多様な展開を紹介するコレクションが充実しました。同じテーマでは、「人間像」のコーナーで紹介した今村輝久や、同時期に開催した「LOVE (your) LIFE!」展で紹介した中ハシ克シゲの作品も、近年収蔵しました。

さらに現代の美術としては、新宮市出身の写真家、鈴木理策の作品がコレクションに加わり、2015（平成27）年の「リアルのリアルのリアルの」展で紹介した、和歌山市出身の画家、小柳裕の作品（図7）も収蔵しました。また2009（平成21）年度に多数の現代美術コレクションを寄贈してくださった田中恒子氏からは、改めて多数の作品をご寄贈いただきました。鈴木久雄の彫刻などとともに、「現代の美術」のコーナーで紹介したこれらの作品は、当館のコレクションに新しい風を吹き込むことになります。

その他、今回の展示では紹介しきれなかった作品は数多くあり、今後さまざまな展覧会で紹介する予定です。充実した作品の収集は、多くの方々の厚意や熱意に支えられて実現したものです。当館の活動にご賛同いただき貴重な作品をご寄贈くださった所蔵家や作家のみなさま、さまざまな形で収蔵にご協力くださった関係者のみなさまに、改めて感謝申し上げます。　（宮本久宣）

＊ 奥村一郎「石垣栄太郎《ハーレム裁判所の壁画》（「奴隷解放」の部分）について」『和歌山県立近代美術館ニュース』No.97、2019（平成31）年2月15日発行、3～4頁、で詳しく紹介。

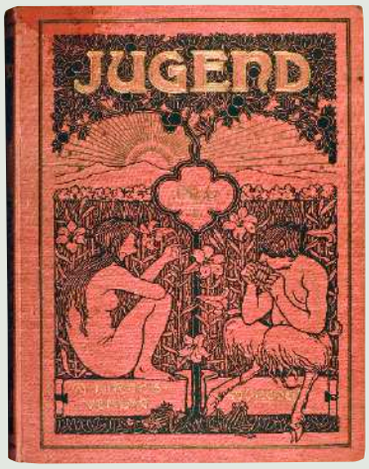


図6　『ユーゲント』
1896（明治29）発行（合本第1冊）、表紙

「現代の美術」コーナー

図7　小柳裕《Shrine (Source of Light 14-7)》
2014（平成26）　油彩・アクリル、キャンバス

「アーティスト」と私たちは、仲間かもしれない。
LOVE (your) LIFE! まいにちがアート

《形象 A》という絵があります。村井正誠の 1939（昭和14）年の作品です。村井が友人の長谷川三郎、山口薫、矢橋六郎らと創立した、自由美術家協会の第３回展への出品作です。このころの村井は「モンドリアン風」の、幾何学的なかたちを画面に構成する、クールな抽象画を描く人だと言われていました。

村井のこの作品を言葉で表現しようとすると、同時代の人たちのようにモンドリアン風の「鮮やかな色彩の矩形（四角）が白い画面に配置されている」としてもいいのですが、ここには幾何学的に正確な四角形はありません。微妙に調整された色彩の、フリーハンドで描かれた「形象（かたち）」があるだけです。

村井は航空写真など、しばしばどこかに実在する情景を元にして幾何学的な抽象絵画を描いています。この「形象」シリーズにも、何か具体的なイメージがあるはずだと探しましたが、なかなか見つかりませんでした。ないはずです。なぜなら、これは村井が自分の部屋においてあるテーブルの上を写したものだったからです。村井が毎日、テーブルの上に積み重ねた本や書類やスケッチの組み合わせでできたかたちが、はっとするほど美しかったというのです。

日常の中に突然あらわれる美しさを発見した経験は、誰にでもあるでしょう。村井のようにきわめて個人的な経験が作り手の創作の契機になっているのなら、同じ人としての作り手と私たちは、よく似た体験という、同じ地点に立っていると言えるのではないでしょうか。

村井正誠《形象 A》1939（昭和 14） 油彩、板

この「日常」あるいは「生活」「暮らし」「生命」から生まれた美術作品と私たちが向き合うきっかけにしようと、4 月から 6 月にかけて開催した展覧会が「LOVE (your) LIFE! まいにちがアート」でした。特別な人、特別なものに見える、美術作家と美術作品と私たちの間には共通したベースがあります。それが、生活であり、生命です。そうしたベースを意識するだけで、美術作品は身近になり、作り手の問題は私たち自身の問題にもなります。美術作品と創造を愛すること、そして、それをとおして私たちの生活、互いの生命を、より愛しいものにしていくことを知ることは、ひとつの作品を作るにもまさる創造です。

美術作品というと、日常生活からかけはなれたものという意識が私たちにはあるかもしれません。近現代にかぎらず、異なる時代、文化のもとで作られてきた美術作品は、どのようなことを表しているのかがわかりにくい場合もあります。しかし、村井の《形象 A》が、村井の部屋の、毎日の作業でやや乱雑になったテーブルの上から来たように、作り手の日常から生まれた作品はたくさんあります。

展示は、「ひとは / まいにち / つくる。」という3つの章で構成しました。「ひとは」の章では、作り手たちと、私たちの共通項である日常のあらわれとして、まず家族や友人たちとの関係の中にいる自分と

ワークスペース

「わたしの / つくる / 手」ワークシート

野田哲也《日記 1976 年 2 月 15 日》1976（昭和 51）　木版・シルクスクリーン、紙

靉嘔《Broken Heart》1968（昭和 43）
シルクスクリーン、紙

いうものを考えていただこうと思いました。自分がどういうものなのかを見つめる「自画像」、人がどんなものなのかを見つめる「肖像画」は、昔からある美術のジャンルです。

「まいにち」の章では、人の毎日がなにでできているのか提示しました。たとえば自分がどこにいるのかを見つめる「風景」があります。自分が住んでいる街、庭、部屋を描いた作品は数えきれません。村井のようにテーブルの上にあるものを描く「静物画」も一つのジャンルとなっています。日々繰り返す行為も、美術のテーマとなります。食べること、遊ぶこと、学ぶこと、働くことなど、おそらく、アートになったことのない行為はないでしょう。

そして「つくる。」の章では、手を使って「つくる」ことに徹した作品を紹介しました。折る、編む、縫うといった、だれもがしている行為を繰り返すと、行為そのものは単純なのに、ひとつの作品となったときには特別なものになっています。同じことを毎日繰り返している、という無力感がわいてくるとき、美術作品のなかにある繰り返すことによって作られる力を見ることは、私たちの日常の支えとなるでしょう。

自分はアーティストではない、と思っている私たちも、今まで何も作らなかったということはないでしょう。そして、これから何も作らないということもないと思います。そう考えると、美術作品の制作という、不思議な作業を繰り返しているひとたちと彼らの作ったものを、自分の目の前にいるひとを理解したいと思うように、理解したくなるかもしれません。

美術作品を見ることとは、他者を通して生み出されたものと向き合うということです。そうした自分とは異なる視点への共感と理解や、時に理解できないことをそのままに受け入れることも、さまざまな人々が生きるこの社会において必要とされるでしょう。

多様な表現の中に、自身と美術作品、その作り手、あるいはそれを生み出した文化との接点を見つけ出し、美術作品が持つ、私たちの人生を豊かにする力を感じ取ることは、大きな経験になります。ときには、それをきっかけに自分の日常に帰ったとき、まわりの人とのつきあいや、毎日繰り返す行為がかけがえのないものとして発見されるようなこともあるでしょう。美術作品の作り手と、私たちの間に、共通のベースである日常をおいて、それを踏まえた上で、日常とアートを分けるものはなにか、ということを考えてみるのも面白いのではないでしょうか。

今回は、当館の青木加苗学芸員と一緒に企画を考え、会場の出口にワークスペースを設けました。ここでは、ふたつの提案をしてみました。「きょう、（なに）つくる？」と「わたしの / つくる / 手」です。展示で見た美術作品の作り手たちと同じ「つくる」人として、自分の手を使ってなにかをすることで、作品を見た経験を自分のこととして実感して欲しいと思ったからです。

「きょう、（なに）つくる？」は、展示された作品のなかから、「つくりたい気分」にさせてくれた1点をあげ、自分が今日作ろうと思うものを描いてみよう、というワークシートでした。これから帰ってからつくる晩ご飯のメニューから、抱いている夢までが絵や文字で描かれ、そのひとつひとつを会期中展示していきました。

そして「わたしの / つくる / 手」は自分の手をなぞって、それをもとに自由に表現してみようというワークシートでした。1歳10ヶ月から72歳まで、展示を見た人たちのおよそ全世代が、352点もつくって残してくれました。こちらはファイルに綴じて、どなたでもご覧になれるようにしました。

どの人も、それぞれのアプローチで、おそらく個人的には知らない作り手の作品に向き合い、見ること、つくること、残すことを、自分の「こと」にしていました。それを見て、私もこの手で何をしてきたのか、これからなにをしていくのかを考えました。　（植野比佐見）

和歌山県庁舎建設80周年記念シンポジウム

和歌山県庁舎をつくった人びと（1）

2018（平成30）年12月24日　14:00 ～ 16:30　和歌山県立近代美術館

2018（平成30）年、和歌山県庁舎本館が建設されてから、80年を迎えました。これを記念したシンポジウムを、和歌山県教育委員会と一般社団法人和歌山県建築士会の共催で、和歌山県立近代美術館2階ホールにて開催しました。
全体の構成は次の通りです。このシンポジウムの模様を3回にわたってお伝えします。

（和歌山県教育委員会文化遺産課　御船 達雄）

【基調講演】
和歌山県庁舎の歴史と魅力　中西重裕（和歌山県建築士会）
【個別報告】
和歌山県技師松田茂樹　高垣晴夫（和歌山県建築士会）
増田八郎の生涯と寄贈された資料　藤隆宏（和歌山県立文書館）
和歌山県庁舎の建築図面　河崎昌之（和歌山大学）
県庁舎を飾った芸術家保田龍門　井上芳子（和歌山県立近代美術館）
県庁舎を造る　御船達雄（和歌山県教育委員会）
【パネルディスカッション】
司会・コーディネーター　明石和也（和歌山県建築士会）
パネリスト　井上芳子、河崎昌之、高垣晴夫、藤隆宏、中西重裕、御船達雄

建設80周年を迎えた和歌山県庁舎本館
撮影：長岡浩司

【基調講演】

和歌山県庁舎の歴史と魅力

中西重裕（和歌山県建築士会）

基調講演では、中西重裕さんが、まず県庁舎の歴史を説明し、その魅力を語りました。

1871（明治4）年の廃藩置県により、和歌山城砂の丸内に藩の建物を利用して県庁が置かれた後、その北側の旧朝比奈家屋敷跡に、1876（明治9）年、建設されたのが初代県庁舎です。初代県庁舎は木造2階建、擬洋風のコロニアル様式でしたが、1888（明治21）年の火災で焼失したため、翌1889（明治22）年に木造2階建、英国風ルネッサンス様式で二代目県庁舎が建設されました。1898（明治31）年には県会議事堂が建設されましたが、議事堂は県庁から東へ500m程と離れていて不便な立地でした。

二代目県庁舎は、業務拡大によって次第に手狭になります。また白蟻被害が進行したり、県庁北側の紀ノ川に架かる北島橋から延びる幹線道路に、県庁が支障となることから、移転計画が持ち上がりました。

そしていよいよ現在の県庁本館である三代目県庁舎が、久野丹波守屋敷跡に建設されることになったのです。久野丹波守屋敷跡は、明治時代に和歌山監獄となり、監獄が移転した後は、空き地になっていました。

1935（昭和10）年に新庁舎の設計がスタートします。耐震耐火の鉄筋コンクリート造4階建とすることが県技師の松田茂樹により計画され、東京帝国大学教授の内田祥三（うちだ よしかず）が設計を監修しました。そして内務省の技術官僚であり、富山県庁舎を設計した増田八郎が実施設計を担当し、坪井善勝が構造設計を受け持ちました。坪井は、世界的な建築家丹下健三の作品の構造設計も後に行っています。工事は入札の結果、清水組（現在の清水建設）の施工となり、工事が進められました。工事中の写真には、当時はまだ残っていた旧監獄北門から見た建設現場や、県庁舎の後ろに久野屋敷時代からある三宝松も写っています。

こうして1938（昭和13）年3月、ネオルネッサンスを基調とし、決して華美ではないけれども、端正で美しい県庁舎が完成したのです。正面の6本の付柱が特徴的な外観は、テラコッタが用いられています。内部は、黒大理石やテラゾーで仕上げられ、漆喰天井など沢山の見どころがあります。正庁の室内正面には奉掲所が設けられ、その額縁は黒江の漆器職人が本堅地蝋色漆塗（ほんかたじろいろうるし）りで仕上げました。議場は県庁一の大空間で3階から4階が吹き抜けです。3階が議場で、4階は傍聴席が議場をU字形に取り巻くよう配置されています。屋上に奉安殿があるのは、戦前という時代を感じさせます。

そんな県庁に一大危機が訪れます。1945（昭和20）年7月9日夜のアメリカ軍の空襲です。県庁舎は幸い類焼を免れましたが、市街は一夜にして焼け野原となり、和歌山城天守閣も焼け落ちました。アメリカ公文書館に残る戦後直後の古写真からは、県庁舎が空襲を避けるため迷彩模様に塗られていたことが分かります。また戦後の復興の中、1947（昭和22）年6月に天皇陛下が和歌山県に行幸された折りには、質素にということで、知事室が陛下の宿泊所となり、寝台や椅子、ラジオなどが運び込まれたといいます。

1957（昭和32）年と1962（昭和37）年には増築をして、山形から日形に平面型が変わりました。その後も県庁は増床の必要があり、1964（昭和39）年に東別館、1966（昭和41）年に北別館、1968（昭和43）年に警察本部が、別棟で建設されました。戦後に建設された別館群は耐震性が低く、近年大規模な耐震改修工事が必要となったのに対し、1938（昭和13）年建設の本館はほとんど補強の必要がありませんでした。本館の基本設計を担った松田茂樹の思いが現れているといえます。

2018（平成30）年4月15日に県庁舎建設80周年記念見学会を開催したところ、260

講演する中西重裕さん

1938 年 1 月竣工間近の県庁舎
（和歌山県営繕技師松田八郎関係資料より）
和歌山県立文書館蔵

県庁舎を設計した技術者たち
右端が内田祥三教授　下段右が増田八郎
（和歌山県営繕技師松田八郎関係資料より）
和歌山県立文書館蔵

増田八郎ご一族からの聞き取り調査
中央が増田紀一氏
（2018 年 7 月 25 日、和歌山県東京事務所にて）

人あまりもの県民の皆さんが見学に来られました。県庁は 80 年間現役であるところが素晴らしいし、皆さんの関心が高いことが良くわかります。

中西さんは最後に、県庁舎が健全に維持され、将来にわたって庁舎として使われ続けていくことを願うとして、講演を結びました。

【個別報告】

和歌山県技師松田茂樹
高垣晴夫（和歌山県建築士会）

個別報告では、初めに高垣晴夫さんが、松田茂樹（1895 − 1991）について話しました。松田茂樹は和歌山県職員として、県庁舎の基本設計を担った技術者です。一言でいうと、松田茂樹は「種をまいた人」であると高垣さんは称します。

松田茂樹は 1895（明治 28）年に粉河（こかわ）（和歌山県紀の川市）で生まれ、東京高等工業学校（現東京工業大学）で建築を学び、大阪の気鋭の建築家である渡辺節（せつ）設計事務所に就職しました。しかし病気により渡辺節設計事務所を退職し、1921（大正 10）年に和歌山県の技手となります。その後、技師となった松田は鉄筋コンクリートの構造に明るく、庁舎や学校を安全な建物とすることを目標としました。

県庁改築計画が持ち上がると、松田は県庁舎の基本設計をスタートさせます。松田は、新しい県庁舎を、通風、採光に配慮され、かつ堅固さを備えた災害に強い建物として設計しました。そして飽きられず美しい外観を持った建物となることも目指しました。松田の基本的な設計思想は、増田八郎の設計チームに引き継がれます。このように松田は、県庁舎建設の種まきをしたのです。

松田は戦後、和歌山城天守閣の再建事業でも注目すべき役割を果たしました。東京工業大学の藤岡通夫教授が再建の監修をしましたが、同校は松田の母校であり、藤岡は松田の後輩でした。こうしたつながりから、和歌山に藤岡を呼んだのは松田ではないか、そして戦前に藤岡へ城郭の研究を持ちかけたのも松田ではないかと推測します。実際、後に城郭研究者として知られる藤岡の初論文は、1939（昭和 14）年に書かれた和歌山城に関するものでした。和歌山城天守閣は、藤岡の指揮のもとで松田が図面を描き、1958（昭和 33）年に再建＝復興します。熊本城より 2 年早く、全国でもいち早い天守閣復興となりました。

松田はまた、高野山交番派出所、加太交番、エルトゥールル号記念碑などの設計も手がけており、県内には今も作品が残っています。さらに松田は、和歌山県立工業高校で 12 年間建築について教鞭を執り、沢山の人を育てました。松田のまいた種は和歌山の建築界に大きく芽吹いたのです。

増田八郎の生涯と寄贈された資料
藤隆宏（和歌山県立文書館）

続いて、藤隆宏さんが、県庁舎の実施設計を担当した増田八郎（1895 − 1945）についての報告をおこないました。

2016（平成 28）年 10 月 21 日、増田八郎の息子さんである増田紀一氏や、八郎の娘さん、お孫さんが和歌山県庁管財課を訪問しました。県庁舎に関する資料を寄贈したいがためです。歴史的資料として、県立文書館が寄贈を受けることになった資料は 40 点余り、中でも県庁舎工事写真を含むスクラップ帳はこれまで全く知られていない貴重なものでした。

そして 2018（平成 30）年 7 月 25 日にも、和歌山県東京事務所で増田家ご一族からお話しを伺う機会があり、その際、履歴書等を含む都合 65 点の資料が、追加で文書館に寄贈されました。特に 1944（昭和 19）年 4 月頃作成された履歴書は、これまで研究者の間でさえ知られていなかった増田の経歴を知ることができる貴重な資料でした。

履歴書によると、増田は東京日本橋で袴などを製造販売する立花屋の長男として、1895（明治 28）年に生まれました。極めて優秀だった増田は、東京帝国大学に入学し、卒業後は内務省に入省します。家業は弟が継ぎました。内務省は戦前期において最も強大な官庁ですが、増田はそのなかでも都市計画に関わる花形部署に配属され、後には関東大震災の復興局にも配属されました。1929（昭和 4）年には、仙台の東北大学の技師となり、営繕課長、助教授と進み、1933（昭和 8）年まで務めます。

同年には富山へ富山県建築技師として派遣され、富山県庁舎を設計しました。そしていよいよ 1935（昭和 10）年、和歌山県技師として和歌山へ来県し、県庁舎を設計したのです。その後、増田は文部技師として国史館造営委員会幹事を務め、国威発揚の施設を計画しますが、戦争で延期となりました。1942（昭和 17）年には軍事保護院技師として、傷痍軍人のための病院の計画に、空襲や物資不足に悩みながらも携わりました。しかし戦争に翻弄されるなかでの激務により増田は体調を崩し、1944（昭和 19）年には依願退官、そして 1945（昭和 20）年 9 月 29 日に結核で亡くなりました。50 才という若さでした。

増田八郎の仕事は 4 つの時期に分けられます。内務官僚の時代、文部官僚の時代、県に派遣され県技師として県庁舎を設計した時代、そして戦争関連施設を設計した時代です。大正時代以降の日本の国家の近代化とともに増田は歩み、戦後に解体された内務省と運命を共にしたのです。

寄贈された資料は県庁舎に限らず、和歌山での家族写真や風景写真、東大の同窓生との交流に関するものなど豊富で、当時のエリートエンジニアの生活がわかるものです。ご子息たちは、八郎は和歌山での生活が生涯でもっとも充実していたと回想します。

藤さんは、このような貴重な資料が和歌山県に寄贈されたことは、和歌山にとってとても有り難いことで、県民の財産として活用して欲しい、文書館デジタルアーカイブでも公開しているので、ぜひ皆さんで見て欲しいと結びました。

「保存」の話をしよう。

⑨ 作品整理について

当館には、およそ12000点ものコレクションがあります。以前、図書館の司書だった方に10000点までは憶えておけるから、10000点を越えるまえに、なにがどこにあるのか分かるようにしておくとよいと伺いました。

2つの収蔵庫も、すでに満杯で、作品を出すこともそろそろ難しくなってくるでしょう。出すことが難しい、というのは移動が難しいということです。移動が難しいということは、ぶつけるなど物理的な事故の可能性が高くなることです。だからこそ、何がどこにあるのかを把握して、無駄な作品の移動を避ける必要があります。そのためには合理的な整理がされていなければなりません。

軽くて小さいものは上、重くて大きいものは下に。箱に入れられない絵画などは、引き出し式のラックに余分な隙間ができないように位置を決めてかけています。箱があって並べておけるものは棚に。互いの重さがかからないように大きさを組み合わせて、必要なときにはさらしで縛ります。シートは同じ規格のマットに入れて、重ねて引き出しにしまいます。細かなものは、保存用の紙でできた箱にまとめ、大きくて重い立体は、パレットという台にのせ、倒れないようにさらしで縛ります。こうしておくと、ハンドリフトで動かして掃除もできます。

版画など主に紙作品が保管してある棚

引き出し式のラック

そして、これが大事なのですが、展示が終われば、出した元の場所にしまいます。そして、しまった場所を記録します。探し回ることになると、作品の移動が多くなって、その分、事故の可能性が高くなるからです。引き出さなければ、なにが掛けているのかわからないラックには、配置図面と写真をラベルにして貼っています。引き出すときに作品に与える振動をできるだけ少なくするためです。

家の中の整理とほとんど同じではないかと思います。美術作品も、家財道具も、事故があれば壊れる、同じ「もの」なのです。違うところは、買い換えられるものではないというところでしょうか。作品の整理に励んでいるからといって、暇なわけでも、潔癖の病というわけではありません。出したままだとすぐにしまいたがるのも、だらしがないのが嫌なだけでなく、危険だからです。私は、皆さんのお家で「出したら元に戻そう」といつも言っている人に、共感できるのではないかなと思います。　（植野比佐見）

ハンドリフトで作品を移動

Museum Calendar

開館／9時30分～17時00分（入場は16時30分まで）
休館／毎週月曜日（祝休日の場合は開館、翌平日休館）

9.18（水）– 10.20（日）

時代の転換と美術

「大正」とその前後

新元号による時代が始まるのを記念して、明治から大正、そして昭和と、15年の短い間に2度の改元が行われた大正時代とその前後の美術を紹介します。

萬鉄五郎《風景》1922（大正11）頃　個人蔵

9.10（火）–10.20（日）

コレクション展 2019-秋

特集 滋賀県立近代美術館 所蔵品より **みやこの洗練 明治の京都画壇**
特集 生誕130年記念 **せんぱん　ー前川千帆の版画ー**

11.2（土）– 12.15（日）

特別展　日・チェコ交流100周年

ミュシャと日本、日本とオルリク

19世紀末から20世紀にかけて、ジャポニスムと呼ばれる日本文化への熱狂がヨーロッパの各地で起こりました。パリで活躍したアルフォンス・ミュシャ、実際に日本に来て木版画技法を学び持ち帰ったエミール・オルリクは、ともにチェコ人でした。チェコと日本の交流100年を契機として、複雑な歴史を背景に展開した両国の美術の影響関係を紹介します。

アルフォンス・ミュシャ《「ジョブ」ポスター》1898　宇都宮美術館蔵

メールマガジン Facebook twitter ご案内

メールマガジンでは展覧会の情報はもちろん、講演会、トーク、ワークショップなど当館に関連するタイムリーなトピックスを定期的にお届けしています。当館ホームページよりご登録いただけます。また Facebook や twitterでも、最新の情報を発信しています。あわせてご利用ください。

友の会　会員特典いろいろ

1. 展覧会の無料観覧
2. 各種行事への参加（美術鑑賞ツアー、ミュージアムコンサートなど）
3. 展覧会のご案内、美術館ニュース、その他情報の配布
4. 版画の頒布会への参加
5. 当館ミュージアムショップでの割引
6. 館内レストランでの割引

入会のご案内

一般会員 6,000円
学生会員 3,000円

ミュージアムショップにてお手続きいただけます。会員証即日発行。郵便振替でもお申し込みいただけます。詳しくは友の会事務局まで。
Tel. 073-436-8690　担当：中川

和歌山県立近代美術館ニュース　No.99
編集発行／和歌山県立近代美術館　〒640-8137　和歌山市吹上 1-4-14
Tel.073-436-8690　Fax.073-436-1337　http://www.momaw.jp/
発 行 日／2019年9月27日　デザイン／鶴田デザイン事務所　印刷／株式会社 協和

和歌山県立近代美術館